

図書館はどう変わろうとしているか

上村光弘

(市民研・理事)

皆さんは、図書館を利用しているだろうか？ あなたにとって図書館はどういう役割をはたしているだろうか？ 先だつての6月7日、文京区の汐見地域活動センターにて、市民科学研究室談話会「図書館はどう変わろうとしているのか」をおこなった。話題に取り上げたのは、都道府県や市区町村といった地方自治体が設置している公立図書館である。参加者は図書館関係者も含めて7人であったが、非常に中身の濃い議論ができたように思う。

自治体の予算制約の中、図書館は曲がり角にあると感じている。【表1 公立図書館経年変化】を見てみよう。図書館の数は右肩上がりが増えて一方、資料費は1998年をピークに減り続けている。また、【表3 図書館の職員数】によると、職員の半数以上は自治体の正規職員でないことがわかる。日本の経済が元気をなくしている中で自治体の予算は逼迫しており、当然そのしわ寄せは図書館の資料費、あるいは職員の非正規化にも現れているということだ。

【表1】
日本の図書館 統計と名簿2013 (社)日本図書館協会 201401
公立図書館経年変化(1983・84、93・94、98・99、2003—13)(p29)

年	図書館数	蔵書冊数 (千冊)	年度	個人貸出 登録者数 (千人)	個人貸出 貸出数 (千人)	資料費 前年度決算 (万円)
1983	1,487	97,172	82	10,947	188,280	1,466,574
1984	1,569	105,369	83	12,530	203,263	1,251,500
1993	2,118	198,244	92	21,950	330,099	3,079,246
1994	2,207	210,082	93	23,155	365,256	3,242,020
1998	2,524	263,121	97	33,091	453,373	3,696,972
1999	2,585	276,573	98	35,755	495,460	3,616,139
2003	2,759	321,811	02	42,705	571,064	3,541,654
2004	2,825	333,962	03	46,763	609,687	3,522,070
2005	2,953	344,856	04	47,022	616,957	3,431,266
2006	3,082	356,710	05	48,549	618,264	3,284,725
2007	3,111	356,713	06	48,089	640,860	3,170,018
2008	3,126	374,729	07	50,428	656,563	3,094,714
2009	3,164	386,000	08	51,377	691,684	3,066,076
2010	3,188	393,292	09	52,706	711,715	3,074,181
2011	3,210	400,119	10	53,444	716,181	2,941,037
2012	3,234	410,224	11	54,126	714,971	2,894,189
2013	3,248	417,547	12	54,792	711,494	2,858,814

※私立図書館を含む公共図書館の経年変化
 ※貸出数には視聴覚資料も含む
 ※資料費は経常的経費
 ※2003年より、前々年度決算額となる

【表2】						
日本の図書館 統計と名簿2013 (社)日本図書館協会 201401						
公立図書館集計(p28)						
	市	政令都市	特別区	町	村	合計
a 自治体数	769	20	23	746	184	1,742
b 図書館設置自治体数	759	20	23	458	46	1,306
c 図書館設置率 b/a (%)	99	100	100	61	25	75
d 人口(千人)	79,908	26,550	8,592	10,763	848	126,660
e 図書館設置自治体人口(千人)	79,319	26,550	8,592	7,945	352	122,757
f 設置自治体人口割合 e/d (%)	99	100	100	74	41	97
※a 自治体数、b 図書館設置自治体数 は2013年4月1日現在						
※d 人口、e 図書館設置自治体人口 は2012年3月31日現在						

【表3】		
文部科学省 平成23年度社会教育調査「図書館の職員数(全国)」		
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001017254		
職員数		
計	36,269	
専任	12,479	34.4%
兼任	2,180	6.0%
非常勤	17,743	48.9%
指定管理者職員	3,867	10.7%

以下、当日話題とした4つの図書館について、参加者からの主な意見とともに紹介する。

●[まちとしょテラス](http://machitshoterrasow.com/index.html) (長野県小布施町立図書館)

<http://machitshoterrasow.com/index.html>

この図書館は小布施町にただひとつだけある小さな図書館である。2009年にこれまでの町立図書館にかわってオープンした。知的資源イニシアチブが主催する Library of the Year 2011 を受賞(資料19)。初代館長は公募により決定した花井裕一郎氏。花井氏はもともとテレビの映像演出を仕事にしており、この図書館のありかたにも反映されているように感じる(資料5)。その特徴は、図書を媒介にした地域の拠点・情報発信の場、人々を巻き込んでコミュニティのハブとなるような場を目指しているということである。従来の図書館の枠に収まらないイベントを仕掛けている。花井氏は、図書館は単に本を無償で貸し出すところであってはならないと主張している。

談話会では、このあり方は公民館活動ではないかという意見があった。この点については花井氏自身が、図書資料を媒介としているところが従来の公民館活動とは違う点であると答えている。また、資料とは図書に限らずあらゆる情報ととらえており、あらゆるものがその対象となりうるとする。小布施の人をインタビューしてアーカイブする「小布施人百選」などの特徴のある活動は楽しそうだ。

●千代田区立千代田図書館

<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/facilities/chiyoda/>

ホームページを見るといきなり「あなたのセカンドオフィスに。もうひとつの書齋に」と表示される。従来の図書館は、昼間に来館できる住民が主たる利用者として想定されていた。この図書館は非住民のビジネスパーソンに重点をおくことを目指して2007年、千代田区役所のビル9、10Fにリニューアルオープンした。そのためインターネット接続の設備が充実しており、平日夜は22時まで開館している。Library of the Year 2008を受賞。初代図書館長の柳与志夫氏は、本をタダで貸し出すだけの「無料貸本屋」を批判し、新しい都市型図書館を目指したとする(資料6)。ターゲットとなる利用者を明確にし、費用対効果を考えてサービスを展開するという意味で、マーケティング的視点が垣間見える。

談話会では、結局のところ図書館ではなく場所貸しではないかという批判的意見があった。事実、柳氏は空間をゆったりさせるために開架冊数を犠牲にしたと述べている(資料6 p45)。

●佐賀県武雄市立図書館

<http://www.epochal.city.takeo.lg.jp/winj/opac/top.do>

いろいろ物議を呼んでいる図書館である。武雄市唯一の図書館であり、2013年にオープンした。最も大きな特徴は、指定管理者がCCC(カルチャ・コンビニエンス・クラブ)であり、蔦屋書店とスターバックスコーヒーが併設されていることである。Tカードを図書カードとして利用している。市長主導で強引に進めたとの批判があり、図書館関係者には非常に評判が悪い。糸賀雅児氏(慶応大図書館情報学)は「公設民営のブックカフェ」と表現した。一方、自治体の視察が相次ぎ、宮城県多賀城市、山口県周南市、神奈川県海老名市などが、CCCとの契約で同様の図書館を作ろうとしている。(資料2、3、4)

談話会でも、これで蔦屋がペイするなら、そもそも自治体が運営する理由がない、観光施設ではないか、などの批判が出た。個人的には雑誌のバックナンバーがない、書庫がない、などが気になる。また図書館に併設されているはずの歴史資料館が、Webを見てもどこにあるのかわからない。武雄の蘭学は有名であり、この遺産を生かさず都会的な雰囲気強調したというのは、まちとしょテラソとは正反対の方向性と言えるだろう。一方、書店やカフェが併設されるのは、やり方によって必ずしも悪くないような気もする。

●神奈川県立図書館、県立川崎図書館

ここでは、閲覧・貸出サービス廃止問題を紹介した。この問題の経緯は次のとおりである(資料8、13)。2012年11月に県教育委員会が、神奈川県立図書館、県立川崎図書館の閲覧・貸し出しサービスの廃止検討を表明、県立2館の蔵書提供は市町村立の図書館経由に一本化する案を出した。県予算の逼迫、神奈川県立図書館に近接する横浜市立図書館の規模が大きく二重行政をやめるべきとの理由。しかし、廃止反対が意見が多く寄せられ、2013年2月に同提案を撤回した。

特に神奈川県立川崎図書館は、科学技術に特化しており社史などの特殊な資料を蒐集している。そして京浜業地帯の企業群にサービスを提供しているという特徴があった。このことが廃止撤回の大きな原動

力になったように思う。端的に言えば、金の卵を生むガチョウを、エサ代が惜しいからと言って殺してしまっているのか、ということだ。ただ、県からの独立性を確保した政令市に県立図書館が立地していること自体に根本的な疑問がある。

サンプリング調査の結果、神奈川県立図書館（含む県立川崎図書館）が2006年の上半期に購入した書籍の90%が横浜市立図書館の蔵書にあるとの指摘がある（資料11）。ただし、県立川崎図書館の特徴である社史コレクションなど、非売品の資料は数字に反映されていない。また、横浜市立図書館の購入資料の平均価格は1620円、県立図書館2館は3563円であり、そもそも資料の性格が違うとの指摘もある（資料8）。

図書館の二重行政批判については、「市区町村の公立図書館に関しては、ベーシックな情報へのアクセス権は最低限自前で確保しつつ、地域固有の情報は充実させる。足りない部分は他館と連携したり、インターネットを活用する。地域の実情に応じて場を演出し、来てみたいと思ってもらう、といったことが必要になるだろう。都道府県立の図書館に関しては、市区町村立の図書館の蔵書を補ったり、より専門的な書籍の充実が要求されるはずだ。貸出は不要」といった意見が出た。ただ、地域特性によってそれが当てはまらない場合も想定される。おそらくどこでも通用する理想的な図書館は存在しない。そこから試行錯誤するしかないだろう。

●理想の図書館とは？

日本の図書館は1970年代以降、1. 貸出重視、2. 児童サービスの充実、3. 全域的なサービス網を柱に発展してきた（資料18 p174）。【表2】によると、自治体のうち75%に図書館が設置されており、人口比で言えば97%の人々が貸出サービス対象になっている。しかし、図書館関係者の間では、欧米の諸外国に比べてまだまだ遅れているという意見が大きいようだ。確かに、25%の自治体には未だに図書館が無い。都市圏に住む図書館利用者にとってはなかなか意識されない点である。また談話会では、病院や刑務所といった場所においても、多様な情報へのアクセス権の確保は満たされていないという意見があった。

一方、利用者のニーズということで、リクエストの多い本は複数購入する図書館が一般的であり、このことが「無料貸本屋」という批判につながっている。まちとしょテラソの花井氏や千代田図書館の柳氏は、同一図書的大量購入に批判的だ。そもそも、市民の要望は多様であり、予算制約もある以上、すべてのリクエストに答えることは限界がある。少なくとも際限のない消費的ニーズに対応することは、図書館の役割とは言えない。まちとしょテラソは行ってみたい良い図書館だと思うが、開架図書は5万冊程度である。都市の図書館に比較して非常に規模は小さい。逆に言えば、規模が小さいからこそ、図書の多さ以外の魅力で人々を惹きつける必要があったとも言える。

結局は、その地域を熟知し、他の組織ともネットワークを作ることができる人材が必要になってくる。非正規の職員が過半数を占める現状では、はたして対応できるか不安が残る。非正規職員よりは指定管理者の方が良いように思える。さらなる問題として考えてみたい。

●資料

1. 猪谷千香『つながる図書館-コミュニティの核をめざす試み』ちくま新書、201401
2. 藤巻幸子「武雄図書館訪問記」他、図書館問題研究会編集『みんなの図書館 2013年9月号』p4～、教育史料出版会、201308
3. 星野盾「一を聞いて十を察す」、図書館問題研究会編集『みんなの図書館 2014年5月号』p79～、教育史料出版会、201404
4. 沢辺均「武雄図書館をたずねて」、『図書館とメディアの本 ず・ぼん 19』p6～、ポット出版、201404
5. 花井裕一郎『はなぼん-わくわく演出マネジメント』文屋、201301
6. 柳与志夫『千代田図書館とは何か-新しい公共空間の形成』ポット出版、201003
7. 小川俊彦『図書館の現場 9 図書館を計画する』勁草書房、201002
8. 図書館問題 | カナロコ まとめ 「【連載】県立図書館「廃止」を問う」1～、神奈川新聞連載
http://www.kanaloco.jp/topic/67857/cms_id/70458
9. 県立の図書館集約問題について - 神奈川県資料室研究会
https://saas01.netcommons.net/shinshiken/htdocs/?page_id=140
10. 神奈川の県立図書館を考える会 | Facebook
<https://www.facebook.com/KanagawaLib>
11. 大場博幸「図書館はどのような本を所蔵しているか」、『図書館とメディアの本 ず・ぼん 19』p32～、ポット出版、201404
12. みわよしこ「「知」の機会不平等を解消するために-何から始めればよいのか」、『LRG ライブラリー・リソース・ガイド 2013年冬号』p6～、アカデミック・リソース・ガイド、201302
13. 田村俊作／小川俊彦『図書館の現場 7 公共図書館の論点整理』勁草書房、200802
14. 県立図書館閲覧廃止撤回：反対多く、県教委転換 | カナロコ
http://www.kanaloco.jp/article/55199/cms_id/54990
15. 「特集 おすすめの図書館」『ソトコト 2013年5月号』p34～、木楽社、201305
16. 日本の図書館 統計と名簿 2013、(社)日本図書館協会、201401
17. 文部科学省 平成23年度社会教育調査「図書館の職員数(全国)」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001017254>
18. 前川恒雄・石井敦『新版 図書館の発見』、NHKブックス、200601
19. Library of the Year - IRI:知的資源イニシアティブ <http://www.iri-net.org/loy/>
20. 図書館法 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S25/S25HO118.html>
21. 図書館年報 2013、(社)日本図書館協会、201307